

秘書職能の史的考察

——欧米と日本の比較研究——

徳 永 彩 子

History of Secretarial Function: Comparative Studies between the West and Japan

Saiko TOKUNAGA

1. はじめに

現在、ビジネス社会においてITの進化により秘書の職務が見直され、その重要性が再認識されているのではないだろうか。論文『日本における秘書職能の史的考察』を書き進めるうちに、秘書がどれほど重要な職務を担っているのかを改めて理解でき、さらに欧米の秘書を歴史的視座からみていく必要性を感じた。企業の国際化が進み、事業展開においてボーダレス化している現在、秘書職においても今後変化の兆しがあるのではないだろうか。秘書の必然性を史的に考察し、今後秘書がどのような方向性を辿るのか検討することは重要なことであると思われる。

したがって、欧米の秘書の史的考察を試みたい。以下、秘書業務のうち「書く（記録を残す）」という秘書に欠かせない作業に着目することによって、文字と記録法の発達を詳述し、古代の秘書職務を主な文明発祥の地に求める。次に欧米の秘書史の流れを概観することによって、欧米と日本の秘書の歴史的共通点と相違点について検討し、現在の私たちが確立すべき秘書像、さらには将来の秘書の方向性を知るための手がかりを求めていくことにしたい。

2. 古代の秘書の源流とその職務

秘書の職能は、秘書に与えられた仕事、秘書が遂行しなければならない仕事、秘書の職務上の役割と定義される。具体的にいうと、ある特定の人物の補佐役を務めることである。したがって、広い意味では人類が集落をつくり、部族の長が登場し始めた時から秘書の歴史も始まったといえる。さらに、秘書的な人物が明確な形として存在しはじめたのは、ある程度文明が栄え、文字が生まれて、指導者の命令や法令を記録に留めるようになってからであったと考えられる。「書く」という技術は古代にまで遡ることができる。エジプトのピラミッドに発見された遺跡によれば、紀元前4000年にはすでにその技術が行われていたようである。古代文字を使って書き、記録を作成していたのは、いずれも専門の「書記」であったとみられる。そのような意味において、秘書の起源は世界最古の文明発祥の地、バビロニア、エジプト、インド、中国などに、その原点を求めることができるであろう。

ナイル下流のエジプト文明は紀元前4000年頃から、チグリス・ユーフラテス河下流のバビロニア文明は紀元前3000年頃から繁栄したとされているが、ほぼ同時期にこの二つの土地でそれぞれ

に違った表記法が生まれている。バビロニアの記録法は粘土板などに葦の茎をとがらせたペンのようなもので文字を刻む方法であったが、その字画が一方が広く、他方が次第に狭くなったくさびに似ていることから、楔形文字とよばれている。この湿った粘土に刻まれた文字を乾燥させたり焼いたりして保存した。

一方、エジプトでは、絵文字や象形文字を用いていたが、彼らはナイル河畔に生えるパピルスという水草の茎を薄くそぎ、縦横に張り合わせた一種の巻紙にペンとインキのようなもので書き付ける記録法を用いていた。ペンは、やはり葦の茎を用いている。パピルスというと、エジプトだけで使用されていたわけではなく、中国から紙が伝わる以前は、アラビアやヨーロッパでも使われていた。古代エジプトの彫像などによっても伺い知ることが可能であるが、書くときにはあぐらをかいて座った膝の上に巻紙状になったパピルスをひろげ、すりおろしたインクを筆につけて書き綴る方法である。このようなエジプトの書記の彫像¹がいくつも残されており、ルーブル美術館、カイロ美術館、大英博物館、メトロポリタン美術館など世界各地の有名な博物館、美術館に所蔵されている。当時、エジプトなどの古代王国では、王が神格化され、絶対的な権力を持ち、その王の言葉を神の言葉として書き留めるのが書記の職務であった。宮殿や神殿に直属する書記は高級官吏であり、税の徴収や会計事務などにも携わっている。君主や大臣たちが読み書きできない場合には、能力の高い書記が多大な権力を握ることがあった。このような書記は、国家の中枢の機密情報を掌握する非常に高い地位にあったといわれる²。

パピルスの生えないパレスチナ周辺では、羊皮紙³に文字を記録した。近年になって発見された「死海の巻物」とよばれる羊皮紙は、ユダヤ教徒たちが残したもので、旧約聖書の最古の記録が残されている。これらの記録を残したユダヤ教徒は“Scribe (筆記者)”とよばれるが、彼らはユダヤ人の指導的立場を握り、キリストの時代には「律法学者」とよばれていた。

インダス文明は紀元前2500年頃から栄えたが、モヘンジョダロの遺跡などによって伺い知ることができるように、極めて高度な水準をもっていたといわれるが、同1700年には消滅している。その時代に用いられたアルファベットのような文字も未だに解明されておらず、謎に包まれたままである。その後、サンスクリット (Sanskrit)⁴が発達したのは紀元前1500年頃とされている。

中国においては紀元前3000年頃の文字が、動物の絵とともに石に刻まれて残っているが、こちらも未だに解読されていない。その後は竹や動物の骨や亀の甲などに文字を刻んだり、絵の具を塗りつけて書いたり、また絹に筆で書いたりなどしていた。火薬、羅針盤、紙、印刷術が中国の四大発明といわれているが、歴史上特筆すべきことは、中国における105年の紙の発明である。後漢の蔡倫が皇帝に紙を献上したのがその始まりである。この紙づくりの技術がヨーロッパに普及したのは1100年になってからのことである。紙はまず中国からアラビアに伝わり、次いでエジ

1 古代エジプトの「座せる書記像」(エジプト博物館、ルーブル美術館所蔵)は有名である。王の言葉を書き留めようとして身構える、眼光鋭い姿は印象的である。

2 古代エジプトには、宮廷や神殿のほか、軍隊、学校などにも書記がいた。書記を養成する学校もあり、厳しく階級化されていたという。教育内容は、「書く」ということのほかに、地理、歴史、算術、外国語、神殿および政府の手続きについての心得などであった。当時の書記は、若者の憧れであり、昇任の登竜門であった。事実、身分制度の厳しいなかで出世していたのは、このような書記学校の卒業生が多かった。

3 羊、山羊などの動物の皮をなめして作った書写材料

4 インド・ヨーロッパ語族のインド語派に属する言語で死語。サンスクリットは「完成された言語」という意味である。

プト、11世紀の中頃にヨーロッパに伝わったといわれる。この当時の紙というものは、麻や古布などの繊維を用いたものであった。また、古代の中国王国において、王は占いを政治に利用し、真人と呼ばれる占卜官とその記録を行う書記が存在した。中国では殷の時代に書記術が生まれ、専門の書記が現れた。書記も真人と同様に、王の言葉を取り次ぐ者として高い地位にあったようである。周の時代（紀元前1046～紀元前256年）には、宮廷書記のほかに王の身邊に仕える官吏も存在した。

ギリシャ文明は紀元前3000年頃にクレタ島で発祥し、最初は象形文字を粘土板に書いていたが、紀元前800年にギリシャ式アルファベットが生まれている。今日、多くの言語に使われているアルファベットという言葉は、ギリシャ語のアルファ・ベーターから発展したものであり、ギリシャ語は現代の言語の中にもその命脈を保っている。ギリシャ文明は、やがて紀元前146年からローマの統治下におかれた。ローマのアルファベットは、今日の英語のそれとほとんど同形である。アルファベットによる表記法になってからは、ギリシャ・ローマの文書は羊皮紙に書かれた。羊皮紙は貴重なものであったことから、重要文書を作成する人物は、やはり学問のある専門の書記であったことが理解できる。

以上、古代の文明国における文字と記録法の発達状況や古代秘書の源流と考えられる書記について、検討してきた。秘書という仕事には、常に「書く」という作業がかかせないため、文字や記録法の歴史を概観することによって秘書の原点・ルーツをうかがい知ることができる。当時は秘書という名称は使われておらず、英語での“Scribe”という言葉で呼ばれていた。“Scribe”とは、次のような意味をもっている（『ランダムハウス英和辞典による』）。

- (ア) 筆記者、写字者 (Penman, Copyist)；(特に印刷術発明の写本の) 筆者 (Transcriber)
- (イ) (特に公的身分をもった) 代書人、書記、達筆家
- (ウ) (ユダヤ教) 律法学者、紀元前5世紀から紀元1世紀に活躍したパレスチナの学者や教師。聖書の筆写・編集・解釈に携わった。

バビロニアやエジプト、ギリシャ、ローマの場合は(ア)と(イ)の意味で、パレスチナでは(ウ)の意味で用いられていたと考えられる。いずれにおいても、当時文字を書くことができた書記は、非常に高度の教養を備えており、古代の秘書の多くはその学問と文章作成能力をもって為政者や教団指導者を補佐する重要な地位を占め、絶大な権力をもっていたと想像される。ここにおいては秘書制度の本質・原点を垣間見ることができる。すなわち、秘書は補佐対象者が持ち合わせていない高度の専門能力をもって補佐するところに存在価値があったのである。今日においてもこの原点に立ち返り、補佐対象者に欠けている能力などを認識し、それを習得していくことにより、秘書の活躍余地は無限大に広がるものと思われる。

3. 欧米の秘書史とその史的な特徴

3-1. ローマ型秘書

秘書史の中で、最も著名な古代の秘書はティロ (Marcus Tullius Tiro) である。ティロは、ローマ時代の政治家であり、哲学者、またある時は文章家⁵でもあったキケロ (Marcus Cicero, 紀元前106～43年) の秘書であった。ティロは元々キケロの奴隷であったが、その後キケロに

5 著作はラテン散文の模範といわれ、『国家論』、『義務論』、『友情論』などが有名である。

よって自由人となり、キケロの演説の場に同行して、数千の音標符号によってその演説を記録したとされている。紀元前60年代のローマの没落貴族カティリナの反政府陰謀の折りには、それをおさえたキケロが、元老院の議事を速記させ、それをもとに情報分析をしたといわれている。このラテン語によるティロ式速記法というべきものが、今日残る速記法の中で最古ものであるといわれている。古代ギリシャ人が紀元前400年頃から筆記体を簡略化した速記方式を用いていたことは、アテネのアクロポリス(acropolis)⁶柱廊の刻銘によっても立証されているが、生活上実際に用いたのはローマ人であったといわれている。キケロからティロに出された手紙の資料において、キケロのティロに対する信頼は、よほど大きかったとみえる。時にキケロはティロにローマの政治情勢について情報を求めた。その情報の内容によって、彼は時折ローマに戻らねばならないこともあった。専らティロの助言によって、こうしたことが指示されたこと手紙には記されている。したがって、紀元前に情報化時代の秘書の原型が存在したわけである。ティロは単なる雑務処理型の秘書ではなく、有力な情報を収集し提供する秘書でもあった。このティロを原型とするローマ型の秘書は、為政者の下にはその必然性において必ず存在したものと思われる。シーザー(Gaius Julius Caesar, 紀元前100～44年)⁷は常に能率を心掛け、馬車の中や馬上で書記に口述するため、揺れていても書けるように書記に工夫させ訓練させたといわれる。

速記の興廃により、中世にはこうしたローマ型の秘書は存在しなかったようである。また近世初期には貴族階級の一部の人々に、現代の秘書に近い秘書がついていた。一般に彼らは男性で、ラテン語を含めて数ヶ国語を操り広い教養を身につけていることが必要条件であった。そのような秘書の一人にミルトン(John Milton, 1608～1674年)がいる。ミルトンは『失樂園』『闘士サムソン』で有名なイギリスの詩人であるが、彼が秘書だったことはあまり知られていない。彼の場合はクロムウェル(Oliver Cromwell, 1599～1658年)⁸の外国語秘書官として、外国文書の翻訳や対外プロバガンダの作成を職務としていたが、それは彼の数ヶ国語に通じる語学力、多方面にわたる博学な知識、さらに文筆の力という高度の能力がかわれてのことだったと推察される。ミルトンの人柄については次のような記述が残されている。

- ・オックスフォード大学で古典を学んでいたのも、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語、イタリア語、スペイン語、フランス語を自由自在に書き、また話すことができた。
- ・記憶力がよく、また思考や整理の方法に優れているので、それがさらに記憶力を助けた。
- ・快活な気分の持ち主であった。
- ・調和がとれていて、なおかつ独創力のある頭脳をもっていた。
- ・節約家であった。
- ・生活態度が正しく、毎朝4時に起き、30分間黙想し、そして夜9時に就寝していた。

当時クロムウェルが共和政府を確立した時、「クロムウェルこそ反逆者だ」という批判もかなりあったようであるが、それに対してミルトンは『偶像破壊者』という書物をしたため、断罪さ

6 古代ギリシャの都市国家の中心市街にある丘陵上に築かれた城砦

7 ローマの武将・政治家で、名門の出身であるが、平民派を地盤として急速に政界で地位を築いた。文筆家としても名高く、『ガリア戦記』、『内乱記』はラテン文学の雄編といわれている。

8 イギリスの軍人・政治家。清教徒。1642年～48年の内乱の際、議会軍を率いて王軍を破り、1649年にチャールズ一世を処刑して共和制をしいた。その後、アイルランドに出征し、スコットランド軍を破ってイギリス諸島を平定した。1651年に航海法を発し、1653年に護国卿に推されて独裁権を揮い、1652年～54年オランダ海軍を破り、イギリス海上制覇の端緒を開いた。

れたチャールズ王の偽善を暴き、英国教会の聖職者達の無知と冒涇を批判した。ミルトンは上役クロムウェルの有能な広報官であったことがこのことから理解できる。

ローマ型の秘書、つまり上役の発言を速記を用いて書き取る秘書が復活したのは、タイプライターが發明された19世紀後半になってからである。タイプライターが發明される前の秘書は全ての書類を手書きで作成しなければならなかったが、その出現により秘書の事務能率を飛躍的に増大させた。速記とタイプライターは秘書を定着させ、量的にも質的にも秘書職を高めるために、大きな役割を果たしてきたものと思われる。

3-2. 速記とタイプライターの出現

次に欧米の秘書に欠かせない速記とタイプライターの歴史を述べる。速記法は初期のキリスト教の世界でも大いに利用されていた。教会の集会には数人の速記者によって記録され、使徒パウロは山上の垂訓 (Sermon on the Mount)⁹ を速記でとったのではないかとする説もある。ところが、ローマ皇帝によるキリスト教の弾圧に伴って衰退し、やがて廃れていく。1世紀の間は、速記は迫害を受けたキリスト教徒の間における通信手段となっていたが、次々と弾圧による悲劇が起こり、速記は暗号として魔術のごとく見られるようになったため、やがて廃れてしまった。中世においては、ほとんど用いられず一時姿を消したのだが、その後宗教改革者ルター (Martin Luther, 1483 ~ 1546年) やカルヴィン (John Calvin, 1509 ~ 1564年) の時代に速記は再び脚光を浴びた。しかし、ラテン語が背後に押しやられるようになると、ティロ式の符号による速記法は葬りさられた。

姿を消した速記術は17世紀に入ると再び活況を呈した。1588年に近代的方法の一つを英国人医師ブライト (Timothy Bright, 1551 ~ 1615年) が發明している。彼は、記号による『短縮で迅速な書き方の技術』という本を出版し、英国議会からは特許を認められていた。さらに1602年には、牧師ウィリス (John Willis) が新しい速記術の小冊子を出版している。それは、従来の単語を符号化するものではなく、発音によって1字ないしそれ以上の文字や句を書き記す方法であった。これはアルファベットを用いた最初の速記法であった。“Stenography”という名称を初めて用いたのもウィリスである。“Steno”とはギリシャ語で「簡単な」という意味であり、“Graphy”とは「書く・彫刻する」という意味である。本格的に速記術が普及したのは19世紀末であり、1837年にイギリスでピットマン (Isaac Pitman, 1813 ~ 97年) が、『速記術の音声書き』を発表した。これは文字によらず音声を表す記号を与えることによって、今までの速記法に大変革をもたらした。次いで1888年にはアメリカでグレッグ (John Robert Gregg) が『やさしい線による教育速記法』を書き記し、近代速記の基礎的な速記法を考案した。これらは、欧米のセクレタリーに必要な不可欠な技能として定着し、1970年以降にワープロがオフィスに浸透して文書処理の方法が大変革を遂げるまで盛んに用いられていたのである。

欧米の秘書にかかせない技術として速記術のほかに、タイプライター (typewriter) があげられる。このタイプライターの發明は、欧米の秘書史上、画期的な出来事として注目すべきである。なぜならば、欧米での速記とタイプライターの技術を持つセクレタリーが、産業革命後から

9 山上の説教ともいい、イエスが山の上で群衆を前に弟子たちになしたとされる説教のこと。祝福の言葉で始まり、敵を愛すること、報い、裁きについての言葉および黄金律を含む。シナイ山での律法授与に倣う象徴的行為と解されるが、史実がどうかは不明である。

徐々に社会に定着し、1970年代頃まで主流であったが、このような欧米の女性秘書の型が出来上がるには、タイプライターの出現が大きく寄与したからである。タイプライターは、1714年にミル（Henry Mill）が「writing machine」という印字機を発明したことに始まり、イギリスのアン女王から特許を得ている。タイプライターの実用的な機種は、1876年にアメリカのレミントン父子商会（Remington & Sons Co.）から発売され、急速に実業界に普及した。

このタイプライターによって、目ざましい事務能率化が進んだ。会社では女性でタイプが打るとセクレタリーとして非常に便利だということに着目し、タイプが打てる人を求め、職を求め人々も就職の条件を有利にするために、競ってタイプライティングの技術を覚える、というように社会風潮としてタイプライターが定着していったことが想像される。さらに、速記でとった手紙をタイプすることによって、益々能率化がはかられることになり、この速記術とタイプの両技能が女性秘書の必須条件として定着していった。このことは、欧米と日本の秘書職を比較する場合のキーポイントである。すなわち、何千もの漢字を用いる日本語を和文タイプライター¹⁰で印字するには手間がかかり、これを秘書の技術として取り入れることは難しかった。これが、日本ではタイプ・速記両技能をもった専門職型の秘書が育たなかった一つの要因であることが、歴史的事実から理解できる。

3-3. 近代のセクレタリーとオフィス・クラーク

今日、欧米で秘書といえば、そのほとんどが女性であるが、元々秘書は男性がそのほとんどを占めていた。1766～1775年頃にプライベート・セクレタリー（private secretary）が登場したといわれているが、19世紀後半のオフィスの技術革新が起こるまで、そのほとんどが男性であった。彼らは、会社幹部や役人の個人的ないしは秘密の文書や資料を取り扱うことを仕事としていた。

今日のセクレタリーに至る経緯としては、このようなセクレタリーのほかに、クラーク（clerk）の存在にも触れておかなければならない。今日、クラークといえば、事務員（office clerk）や店員（customer service clerk）の意味で使われているが、19世紀半ば頃のオフィスにおいては、男性のオフィス・クラークが経営幹部を補佐していたのである。

19世紀後半の欧米では、鉄道による輸送網の拡大によって企業が近代化し、鉄道会社、銀行、保険会社などでクラークが活躍していた。この時代のクラークの主な仕事は、文書作成、ファイリング、基本的な簿記など日常的な事務を請け負うものであった。このように、仕事の中で上役とクラークの関係が密なものとなり、クラークの仕事は高く評価されるようになっていった。

3-4. 20世紀前半

19世紀末には、事業規模の拡大によって、クラークの需要が高まり、さらに第一次世界大戦の勃発によって男性の労働力が不足し、女性のクラークの需要が高まるといった事態に発展した。イギリスの鉄道会社においては、第一次世界大戦の勃発した1914年から終戦の翌年1919年の間に、女性クラークの数が、10倍以上に増加している。また、アメリカでは、南北戦争（1861～1865年）の頃から女性が法律事務所に雇用されるようになり、その後女性の職場進出が盛んになって、1920年にはクラークの半数が女性になっていった（表1参照）。クラークの女性の割合が増加した背景には、このような男性の労働力不足とオフィスの技術革新がある。オフィスの技術革新とは、前述のタイプライターの出現とさらには電話の導入のことである。元々、これらの機械

の操作管理は、性別に関係なく若年労働者の仕事であったのだが、急速に女性の仕事となっていた¹¹。

一方、学歴のある男性は、意思決定を要する幹部として精鋭化し、女性は機械を操作する部下集団となっていた。このような状況の中で、19世紀後半の男性クラークと同じように、日常的な事務を含む文書事務全般を担当する女性クラークが登場してきた。最初、女性クラークの仕事はタイピングと電話対応が主であったが、男性の仕事であった速記やファイリングの技術を覚える者が徐々に現れて、速記のできるタイピストが、口述筆記という直接的な上役との接触を通して信頼を得、男性クラークに取って代わるようになった。事業規模が拡大し、しかもオフィスの機械化による職能の二極分化によって威信を増した男性の管理者が、経営管理活動の機会を増やすために、そのような女性の速記タイピストを重用し、自分でしなくてもすむ仕事、すなわち容易な管理業務を垂直的に分業するようになった。そのような仕事を引き受けるクラークを「セクレタリー (secretary)」と呼ぶようになったのである。このような経緯から、現在でも最も狭い意味でのセクレタリーは、速記秘書 (secretarial stenographer) を指す。特定の上司に付いて、文書事務と容易な管理的職務を代行する女性セクレタリーは、一般の女性クラークより高い評価を受けるようになった。このようにして、セクレタリーは女性の職業として定着していった。

表1 クラークの雇用状況 (イギリス, 1851～1951年)

	全労働者に占める クラークの割合 (%)	クラークの総数に占める 女性クラークの割合 (%)
1851年	0.8	0.1
1901年	4.0	13.4
1951年	10.5	59.6

出所：西澤真紀子『セクレタリアル・スタディーズ』白桃書房 1997年 p28
The Blackcoated Worker 2nd ed. (Lockwood,1989), p.36.

3-5. 20世紀後半から現代まで

アメリカにおいて、セクレタリーは雇用者総数の約4%を占める最大の職業で、しかもその99%が女性で占められており¹²、他の欧米諸国でもほぼ同様の状況を示している。職業分類上は、事務的職業の速記・タイピング・ファイリング関係の職業として位置づけられ、それらの文書事務に加えて容易な管理業務を遂行することを職能としている。しかし、1945年の第二次世界大戦終結後、OA機器の導入によってオフィスが工場化してくると、セクレタリーの職能にも変化が現れてきた。特に、ディクタフォン (Dictaphone)¹³の出現によって組織が再編・合理化され、従来、下級管理者にまで付いていたセクレタリーが、セクレタリアル・プール (secretarial pool) やステノグラフィック・プール (stenographic pool) にまとめられるようになった。

11 女子の仕事になっていった要因としては、次のようなことが考えられる。女子が従来の男子の仕事奪わないように、女子を新しい職種につけたこと。女子の方が男子より器用で話し好きなためタイプライターや電話の仕事に対する適正が高いと考えられたこと。女子の高学歴化 (女子の高卒者数が男子を上回った) で、新しい機械を扱うに足る能力のある女子が増えたことなどである。(西澤真紀子『セクレタリアル・スタディーズ』白桃書房・1997年・29ページ)

12 アメリカのPSI (Professional Secretaries International 全米秘書協会 1998年以降はIAAPと改名) 調べ

13 口述筆記に代わる録音機。送信に電話回線を利用できる。

1960年代頃からは、大規模なオフィスでは、口述筆記やタイピングをしない「アドミニストラティブ・セクレタリー (administrative secretary)」と、専ら文書作成を職務とする「コレスポネンデンス・セクレタリー (correspondence secretary)」のグループに、秘書が二極分化する。しかも、コレスポネンデンス機能がステノグラフィック・プールが発展したワードプロセッシング・センター (word-processing center) に移管されることによって、コレスポネンデンス・セクレタリーの名称が、「コレスポネンデンス・スペシャリスト (correspondence specialist)」, 「ワードプロセッシング・スペシャリスト (word-processing specialist)」などに変わって、今なおセクレタリーの名称を失いつつあるといえる。

一方で、セクレタリーは、従来下級事務職に留まるのが普通であったが、1970年代からはキャリア・アップする者も現れてきた。キャリア・アップの仕方も様々な形があるが、セクレタリーの上級職として、「エグゼクティブ・セクレタリー (executive secretary)」や「アドミニストラティブ・アシスタント (administrative assistant)」などの名称の下、重要な管理業務を任される女性セクレタリーが登場してきた。エグゼクティブ・セクレタリーは口述筆記やタイピングを全く担当しないわけではないが、管理業務を中心に職務を行う。一方、アドミニストラティブ・アシスタントはオフィス全般をコーディネートし、経営の執行部を補佐するのが職務であるため、口述筆記やタイピングなどは本来の仕事ではない。これらは、いわゆる管理職である。このように、OA化による水平面と女性の雇用待遇改善による垂直面との両面における二極分化に加え、機能が法律・医療・工学などの分野に分かれて専門分化し、秘書が非常に多様化している現状がある。

4. 秘書史における欧米の秘書と日本の秘書の共通点と相違点—まとめにかえて

以上、古代の秘書を文明発祥の地に見だし、欧米の秘書を歴史的視座で検討してきた。その中で判明した共通項は、「秘書は上役のために働いた」「職務内容は上役の庶務と文書事務であった」「秘書は高度の教養をもち、ブレン秘書であった」「元来秘書は男性の職務であり、それが女性の職務へと拡大した」の4点であった。一方、相違点は「欧米の秘書は専門職となり得たが、日本ではなり得なかった」「日本は要職者の管理代行に職能上の重点があったが、欧米では付随的であった」「欧米では秘書職の女性化が著しいが、日本においては欧米ほどではなかった」「欧米では秘書の多様化現象がみられたが、日本ではみられなかった」の4点であった。以下、これらの点について整理し、秘書職能との関わりについても触れておきたい。

第1に、両者ともに秘書は組織体のためや不特定多数のためというより、補佐をする特定の人、つまり上役のために働いた。この点は、他の職業や職務と違う秘書の固有な部分である。したがって、秘書は組織上、上役直属の個人スタッフとしてまたは上役直属のスタッフ機関の一員として置かれていたが、いずれの場合も上役の仕事の効率を上げるため、常に上役の側近くで勤務するという執務体制を執った。また、秘書は上役の仕事の一部を任せられ、または上役に代わって仕事をしたため、秘書の仕事は上役の仕事の範囲を超えるものではなかった。

第2に、秘書職務の主な内容は、上役の庶務と文書事務であった。秘書職務は実に多岐に渡っているが、歴史上比較的早く現れ、現代にまで共通的に続いているのが、上役の庶務と上役の文書事務である。庶務や文書事務は秘書以外の職業や職務にもみられるものであるが、秘書の職務としての庶務や文書事務は、決して不特定多数の人のためではなく、上役のためであるという点

で他の職業や職務と違って固有であったといえる。こうした職務を核にし、上役の本務の付随的・周延的な職務を徐々に取り込みながら現代の秘書が構成されてきたようである。ただし、欧米のセクレタリーの場合は、文書事務に関する事務技術を積極的に取り込んだが、日本の秘書の場合は、ビジネス習慣や和文タイプライターの非能率という問題などから、秘書固有の技術として積極的に取り込まれなかった。秘書は、文書事務を担当することで上役の情報管理を補佐し、上役の本務である意思決定を最適化するために補佐したのである。

第3に、歴史的考察より、秘書は高度の教養をもち、ブレン秘書であったと理解できる。古代から文字を操り、上役の指令などを記録し伝達することができた者たちは、歴史上の人物の秘書を見る限り、よほど学問に長け、教養を身につけていたに違いないと思われる¹⁴。例えば、先述したイギリスの詩人ミルトンは、数ヶ国語に通じる語学力や多方面にわたる博識、抜群の文章力をもち、クロムウェルの外国語秘書官として、外国文書の翻訳や対外プロパガンダの作成を職務としていた。ミルトンの場合自らも『失楽園』『闘士サムソン』などで知られる文豪であるから別格であるとしても、多くの歴史上の人物を補佐していた有能な秘書たちの例は多数存在する。第二次世界大戦以降、欧米において秘書という職業が特に女性の職業として一般化した後も、かなりエリート的な威信をもっていたのは、秘書としての訓練を受け、教養や資質にも恵まれた人が多く存在したからである。

第4に、元来男性の職務であった秘書が、様々な要因によって、女性の職務へと拡大している。欧米においては、第一次世界大戦による労働力不足、秘書の二大技能の定着が考えられる。日本においては、高度経済成長期における産業界からの労働力の要請、女性の高学歴化、男女雇用機会均等法の施行などが挙げられる。

次に相違点について、整理しておきたい。第1に、欧米の秘書がもっていた速記とタイプライターの二大技能は、専門職としての地位の確立につながった。しかし、日本では和文タイプライターの非能率という問題により、これらの技能を取り入れることは難しく、専門職とはなりえなかったという史実がある。

第2に、日本の秘書は上役の管理業務の代行に機能上の重点があった。一方、欧米の秘書は速記、タイピングという技術を駆使して上役の活動を補佐することが基本機能であり、管理業務は付随的であったといえる。

第3に、欧米では秘書職の女性化が著しいが、日本においては欧米ほどではなかった。欧米では、第一次世界大戦勃発から多くの職場で男性の労働力が不足し、それを補うため女性が秘書に登用された。さらに、速記とタイピングという二大技能の定着が、秘書職の女性化を益々促進した。今や、アメリカの秘書人口中99%が女性である。日本の場合、女性と男性の割合は3:1である¹⁵。比較的日本で男性秘書の比率が高いのは、秘書室というグループ組織において、男性と女性の役割分業があったからである。日本的経営という特殊な体質により、接待や上役の随行など男性でなければ務まらないとされていた業務があり、女性は男性の補助的な存在におかれることが多かったのである。この男女の役割分業は、1986年の男女雇用機会均等法の施行や1999年の改正法の施行、2007年再改正法の施行などにより、女性が管理職に昇進する割合もわずかでは

14 わが国における秘書については、徳永彩子・大友達也「日本における秘書職能の史的考察」を参照のこと。

15 全国短期大学秘書教育協会『女性の秘書的業務についての調査』・1987年による。

あるが高くなり、キャリア志向の女性が増え、徐々に改善しつつある。男性と同様に、ブレン秘書とよばれる者がこれから先益々増えていくであろう。

第4に、欧米ではアドミニストラティブ・セクレタリーのような少数の有能な秘書と、コレスポンドス・セクレタリーのような大多数の一般秘書の間に二極分化現象がみられた後、セクレタリーの上級職としてエグゼクティブ・セクレタリーやアドミニストラティブ・アシスタントが登場し、非常に多様化している。日本において、秘書は専門分化しているが、欧米のような多様化現象はみられない。今後、日本において秘書の多様化が進むのかどうか定かではないが、両者の展開を今後とも検討していきたい。

参 考 文 献

- 徳永彩子・大友達也「日本における秘書職能の史的考察」安田女子大学研究紀要 第38号 2010
 廣田傳一郎「秘書職務の職能分析—史的考察を中心にして」シオン短期大学研究紀要 第30号 1990
 森脇道子編著『新版秘書概論』建帛社 1998
 白石弘幸『秘書の機能』学文社 1990
 西澤眞紀子『セクレタリアル・スタディーズ』白桃書房 1997
 田中篤子『秘書の理論と実践』法律文化社 2002
 全国大学・短期大学実務教育協会編『秘書学概論』紀伊國屋書店 1997
 廣田傳一郎『秘書学概論』中央経済社 1999
 村上哲大『目的論的アプローチによる秘書理論』都市文化社 1996
 山本侖子『最新秘書学概論』萌文書林 1999
 福永弘之編著『エクセレント秘書学』樹村房 2002
 藤本幹子・谷口佳子・大窪久代・大宮智江『秘書概論』同文書院 1999
 井原伸允 杉浦允監修『秘書概説』学文社 1995
 中佐古勇編著『ビジネス・秘書概論』嵯峨野書院 1998
 夏目通利『秘書入門』実業之日本社 1963
 実務技能検定協会『秘書検定試験2級実問題集』早稲田教育出版 2005A.D. チャンドラー 丸山恵也訳『アメリカ経営史』亜紀書房 1986
 ヴォルフラム・エーバーハルト 大室幹雄・松平いを子訳『中国文明史』筑摩書房 1991
 David Lockwood “The Blackcoated Worker—A Study in Class Consciousness, 2nd ed” Oxford University Press, 1989, U.K.

[2011. 9. 29 受理]